

防長の自然学散歩－16 「伝統的工芸品の古里 二題」

山口県の著名な伝統的工芸品の内、素材に鉱物が使われているものは「萩焼」と「赤間硯」です。今回はそのふるさとを訪ねて、原料採掘の変遷やその歴史を追って見たいと思います。



【萩焼】萩焼は約四百年前の秀吉の朝鮮出兵の際に、連れ帰られた陶工に依って創められた陶器です。世に「一楽、二萩、三唐津」と言われ、茶器として毛利藩の御用窯で製陶されましたが、それ以外でも日用雑器として多く焼かれていた様です。

当初用いられた胎土（陶器用粘土）は萩市内の「小畑土」や近隣の唐人山（歴史を感じる！）山麓の「坂家ノ土」等でしたが、早い時期に枯渇した為か、それともより優れた原料として選択されたのかは定かではありませんが、次第に山陽の大道～四辻に産出する「大道土」が主素材として使われるようになりました。



原料土が山陽道から運搬経費を度外視して運ばれ、今も連綿として使い続けられているのは、この土が萩焼の素材として正に適していたことを物語っている証拠でしょう。

大道土は、「散歩－12」に記述された防府花崗岩が風化して堆積し、シルト質粘土層となったもので、可塑性に富み、鉄分も少なく、また耐火度も比較的高く、収縮も穏やかという好条件を有しているという事です。

【赤間硯】赤間ヶ関は現在の下関市の中心部の古い名称であり、「赤間硯」は800年以上前から作り続けられている同地の特産品です。当初は下関市周辺や門司市で原石が採掘され、交易の中心地だった赤間ヶ関で硯として加工され流通されていたため、「赤間硯」と命名されたのです。

しかしこの地も良質な石材が枯渇してきて、江戸時代後期以降は主として宇部市北部の西万倉岩滝で原石が採取されるようになってきました。現在では工芸品としての加工は、同地の「赤間硯の里」で4軒、下関市の1軒のみとなりました。



原石は関門層群と呼ばれる陸棚型堆積岩（層厚1,000m）の中心部付近の1mの輝緑凝灰岩層から抜き取られています。1億年前頃に北九州から山口県西部に掛けて広大な湖が存在し、そこに発生した火山から噴出した安山岩性の赤色砕屑物が頁岩（薄く層状に割れる泥岩）となって湖底に堆積したものです。

硯の名品として書家が愛用している中国産の「端溪硯」も、材質は同じ輝緑凝灰岩なので、日本産では赤間硯が名品と言われる由縁です。



山口市秋穂二島の大道土の産状
（白い部分が大道土、黄土色は真砂土）



赤間硯の原石
（万倉ふれあいセンター展示室）